



ダンスを披露するラッシュジャンクスのメンバー

世界ダウン症の日

3月21日を国連認定 都内で記念イベント開く

国連が昨年12月の総会本会議で、3月21日を今年から「世界ダウン症の日」と認定したことを受け、日本ダウン症協会（玉井邦夫理事長）は20日、国連認定記念イベントを都内で開いた。イベントにはダウン症の人たちや家族、関係者など350人が参加。「ダウン症の人たちとその家族への理解をもっと広げていこう」と訴えた。

「世界ダウン症の日」は、識の向上を図る措置を講じることなどを求めた。2006年に、世界ダウン症連合の呼び掛けで始まった。ダウン症は23組・46個ある染色体の21番目が3個あることで起こる障害だといわれることから、「3月21日」と定め、国際キャンペーンを展開。ダウン症への理解を広げようと、世界各地でダンスパフォーマンスや絵画展などさまざまな催しを行ってきた。

国連への働き掛けも、こうした国際キャンペーンの一環として行われ、ブラジルなどが中心となり、78カ国の政府が3月21日を「世界ダウン症の日」と認定するよう共同提案。昨年12月の総会本会議で正式に認定された。

総会で採択された決議では「ダウン症は人種・性別などを問わず、800人に1人の割合で生まれ、知的障害と医療的な併発症を引き起こすもの」とした上で、個人の成長には保健医療、早期の介入プログラム、インクルーシブな教育への十分なアクセスなどが不可欠だと指摘。加盟国に対し、ダウン症に対する認

識の向上を図る措置を講じることなどを求めた。「みんなで一緒に前へ進んでいこう」をスローガンに、20日に開かれた記念イベントでは、ダウン症の人たちのダンスグループ「LOVE JUNX（ラッシュジャンクス）」が切れるあるヒップホップ系ダンスを披露。「世界ダウン症の日」が国連で認定された喜びを全体で表現した。

玉井理事長はあいさつで、同協会の前身の「こやきの会」が1963年に結成されて半世紀、ダウン症の人たちとその家族の生活の質や権利保護、福利向上を目指して活動を続けてきたこと、ダウン症の人のほとんどが普通に学校生活や社会生活を送っていることなどを紹介。さまざまな分野で才能を発揮していることなどを紹介。「染色体が違うことが障害ではない。必要な支援が受けられなかったり、ダウン症のことを分かってもらえなかったりすることが障害だ。そのことを認識してほしい」と述べた。

町田さんは、アルバイト先のことでも図書館で、上司は、ダウン症の南正一朗さんと町田望さんが登壇した。南さんは小学生の時、教師に段ボールに入れられて見せ物のようにされたことや、実習先のクリーニング店で殴られたり蹴られたりしたことを報告。「クラスの人みんなが守ってくれてうれしかった。仕事を教える人はあせらず、怒らず教えてほしい」と語った。

記念イベントの最後には、参加者全員で、アピール「だれもがその人らしく、安心して暮らしていける社会に」を採択。ダウン症の人が個人として尊重され、その人らしく暮らしていくために、教育・就労・生活などの各場面で必要な支援が得られるようにすることや、意思決定の前提となる情報や知識を補って本人の意思をくみ取る支援体制を構築することなどを訴えた。

協会からのアピールで